ロシアのウラマーとイスラーム教育網に関する試論

――一九世紀前半まで――

磯貝真澄

【要約】 本稿は、ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域のテュルク系ムスリムのウラマーであるリザエッディン・ブン・ファフレッディンの著作『事績』に基づき、一九世紀前半までの当該地域のウラマーによる、学問のための移動と人的ネットワーク形成の様相を描き出すものである。この地域のウラマーには、一八世紀末～一九世紀初頭までダゲスタンに遊学する者がいたが、その一方で一八世紀後半には、ブハラに遊学する者が増え始めていた。彼らは帰郷後、ザカザニエ地方の村落を拠点とする傾向にあった。さらに、オレンブルク近郊のカルガルのウラマーに学ぶ者も現れた。地域内では彼らに師事するためザカザニエ地方をめざす学生が増加した。そして、ウラマーの師弟関係の系譜を基盤とする学問的紐帯が、カザンおよびザカザニエ地方とブハラの間で形成されていった。ウラマーは、師弟・学友関係や姻戚・親戚関係を築くことで、ある種身分集団のような社会層を形成していた。

史林　一〇一巻一号　二〇一八年一月

一　研究状況と本稿の目的

イスラーム史研究において、ウラマー（イスラーム諸学を修めた学識者、知識層）の移動と人的ネットワークの形成は、オーソドックスな研究対象の一つである。わが国の早い時期の研究では、湯川武が一九七九年に、一二世紀後半～一四世紀半ばのエジプトにおける、マグリブやアンダルス出身のウラマーの活動に焦点を合わせ、高い学識を得るための移動や、

それによる人的コネクションの構築を指摘した。[1] ウラマーが中世以来、学問の探究において良い教師を選ぶことを重視し、良い学統を求めて遊学したことは、概説されるところである。[2]

中央ユーラシアについては、小松久男が一九八三年に発表した研究で、ロシアのヴォルガ中流域のカザンから、中央アジアのブハラに向かうウラマーの留学の流れを提示した。これが先駆であり、小松はとくに一八世紀末～一九世紀半ばにおいて、そうした留学が活発なものだったと述べた。その基本史料は、ヴォルガ中流域のテュルク系ムスリムのウラマーであるメルジャーニー（Shihāb al-Dīn al-Marjānī、一八一八～一八八九年）がテュルク語で著した歴史書『カザンとブルガルに関する有益な情報（*Mustafād al-akhbār fī aḥwāl Qazān wa Bulghār*）』に含まれる、ヴォルガ中流域のウラマーについての伝記的記述である。小松は、この地域のウラマーの著作、とくにウラマーの伝記に着目したという点でも、まちがいなく先駆者である。[3]

ソ連解体でロシアでの史料収集が可能になると、革命以前のヴォルガ中・下流域とウラル南麓のテュルク系ムスリム（ほぼ現在のタタール人、バシキール人にあたる）の社会におけるウラマーやスーフィーの活動、またはイスラーム文化の様相などを解明しようとする研究が開始された。とくに、M・ケムパーは、一八世紀末～一九世紀末のヴォルガ・ウラル地域の代表的なスーフィーとウラマー十数名の活動や思想を、ウラマーの伝記や人名録（伝記集）はもちろん、そうしたスーフィーやウラマー自身の著作など、非常に多くの史料を駆使して詳らかにした。ケムパーの研究は、スーフィーやウラマーの移動や人的ネットワークの形成そのものには特別な注意を払わず、主として思想的な系譜――たとえば、スーフィー思想についてはナクシュバンディーヤ・ムジャッディディーヤ、イスラーム神学についてはアシュアリー・マートゥリーディー学派の広がりや繋がりなど――を提示しようとするが、そうした人びとの修行や勉学の過程を詳述することで、人的関係の具体相についても多くの情報を含んでいる。[4]

ただ、史料収集活動をとりまく事情が好転したとはいえ、ウラマーの移動や人的ネットワークの形成を解明しようとす

る研究はなかなか現れなかった。その主な原因は、あまりに多くの研究者の関心が、二〇世紀初頭の、教育改革等によるコミュニティ社会の近代化をめざした、いわゆるジャディード系知識人らの政治・社会思想にばかり惹きつけられたためだろう。そうした研究テーマの画一化傾向は二〇〇〇年代中頃まで続いたが、その研究動向に批判的であり、村落地域のウラマーが著した村史の諸作品をかねてより研究していたA・J・フランクが二〇一二年、『ブハラとロシア・ムスリム――スーフィズム、教育、イスラームの威信のパラドックス』を発表した。[5] フランクは、ヴォルガ中流域のパランガ村（現ロシア連邦マリ・エル共和国パランガ地区）のウラマーであるベレンゲヴィー（Aḥmad b. Ḥāfiẓ al-Dīn al-Barangawī、一八七七～一九三〇年）の著作『ベレンゲ史（*Ta'rīkh-i barangawī*）』を基本史料とし、著者ベレンゲヴィーやその親族を中心とする、その村に関係するウラマーについての伝記的記述に着目した。そして、それに基づき、一九～二〇世紀初頭のヴォルガ中流域のウラマーが経験したブハラ遊学の様相を具体的に明らかにした。

ところで、ヴォルガ・ウラル地域のウラマーの主な留学先が時期により変遷したことは、従来通説的に知られている。長縄宣博はそのことを、ウラマーの人名録（伝記集）と数点の村史に含まれる情報に基づき、整理して提示した。すなわち、ヴォルガ中流域のウラマーの中には、一八世紀末まで、メッカ巡礼路の途中に位置する北コーカサスのダゲスタン地方に遊学する者がいた。他方で、一七四〇年代、ロシア政府がカザフ草原にオレンブルクを建設し、ヴォルガ中流域から移住したタタール商人がその近郊にカルガル（現オレンブルク州サクマラ地区タタルスカヤ・カルガラ）という町を形成して、中央アジア貿易を開始した。カルガルのモスクやマドラサで活動するウラマーに師事するため、ヴォルガ中流域からそこに学生が集まるようになったが、それはブハラをめざす遊学者の流れに結びついていった。コーカサス戦争のため、一八一〇年頃から遊学先としてのブハラの重要性がダゲスタン地方を上回るようになったと推測される。そして、ヴォルガ・ウラル地域内では、ブハラ遊学経験者に師事するための学生の移動が生じた結果、マスカラ村（現ロシア連邦タタルスタン共和国ククモル地区）とクシュカル村（現タタルスタン共和国アルスク地区）という二つの村落が、ブハラの学統に繋がる域内

学問拠点に発展したとされる。[6]

さて、小松がメルジャーニーによるウラマーの伝記を使ったことはすでに述べたが、それとは別に、ケムパーと長縄が、史料の一つとして共通して利用したウラマー列伝がある。それは一九世紀末～二〇世紀初頭のヴォルガ・ウラル地域で最もよく知られたウラマーの一人、リザエッディン・ブン・ファフレッディン（Riḍā' al-Dīn b. Fakhr al-Dīn b. Sayf al-Dīn b. Subḥān-qul b. Bīk-Muḥammad b. Yūldāsh、一八五八～一九三六年）[7]の代表作『事績（*Āthār*）』第一～二巻である。これはヴォルガ・ウラル地域のウラマーのうち、一七～一八世紀から一八七〇年代前半に死去した者までの約四五〇名を収録する、大部の人名録（伝記集）である。リザエッディンはこれをテュルク語で執筆し、一九〇〇～一九〇八年に、二巻一五分冊のかたちで順次刊行した。[8]後述するように、これは中世以来のイスラームの学術文化における人名録の伝統を受け継ぐものである。前近代アラブ・イスラーム史の専門家であるR・S・ハンフリーズは、中世の人名録を史料とすることで、ウラマー家系の出現過程や、主要な学問拠点とそうした拠点間の関係等の解明、またはプロソポグラフィ的な研究等が可能であると述べ、特定のウラマー個人ではなく、社会的集団としてのウラマーを研究する必要性を指摘した。[9]このことを参考にするならば、『事績』に基づいて、ヴォルガ・ウラル地域のウラマーによる、学問のための移動や人的ネットワーク形成の様相を一定程度解明できるし、する必要があるのである。

こうした研究状況と史料の存在を前提に、本稿はリザエッディンの『事績』第一巻を基本史料として、一九世紀前半までのヴォルガ・ウラル地域におけるウラマーの移動と人的ネットワークの形成を、より詳細なレベルで明らかにする。まず、史料とする『事績』について若干解説する。その後、ダゲスタンへの遊学経験を持つ者が少なくとも一九世紀初頭に死去した世代までは存在したこと、そして、その後の世代は、もっぱらブハラをめざすようになったことを示す。ダゲスタンやブハラで学んだウラマーに師事する学生の域内遊学も生じていたが、本稿は、その際の域内学問拠点がマスカラおよびクシュカルという特定の二村落だったというよりも、これらを含む、ザカザニエ（Заказанье）地方の村々だった可能

性を提示する。ザカザニエとは、カザンの北東方面の村落地域で、およそ西をヴォルガ川、南をカマ川、東をヴャトカ川とする一帯であり、歴史的に「アルスク地方（Арская сторона）」と呼ばれた場所である（地図2を参照せよ）。また、そうした域外・域内遊学により、ウラマーが相互に師弟・学友関係を構築・維持し、さらに姻戚・親戚関係を結んでいたことを指摘する。この作業は、当時「ムスリム聖職者集団（магометанское / мусульманское духовенство）」と呼ばれ、現在の研究者には「一種の身分集団」[10]を形成していたものと理解される、社会層としてのウラマー（または、当時の一般的な用語では「ムッラー」）のあり方を具体的に示すことになる。最後に、多くの域内学問拠点がザカザニエ地方に存在したことの意味を考察したい。

なお、本稿では、ウラマーの名については、極めて著名な人物を除き、アラビア文字からラテン文字に転写するのみとして、カナ表記しない。煩雑さを避けるためである。その転写は原則としてアメリカ議会図書館方式（ALA-LC）のアラビア語転写法による。キリル文字はラテン翻字しない。日付表示は基本的に露暦に基づくものとし、ヒジュラ暦の場合はそのことを明示する。

① 湯川武「中世イスラム世界におけるウラマーの移動性――エジプトにおける西方イスラム世界出身のウラマーの活動」、『オリエント』二二（二）、一九七九年、五七～七四頁。

② 谷口淳一『聖なる学問、俗なる人生――中世のイスラーム学者（イスラームを知る二）』、山川出版社、二〇一一年、とくに四五～四八頁。

③ 小松久男『ブハラとカザン』、護雅夫（編）『内陸アジア・西アジアの社会と文化』、山川出版社、一九八三年、四八一～五〇〇頁。

④ Kemper, Michael, *Sufis und Gelehrte in Tatarien und Baschkirien, 1789-1889. Der islamische Diskurs unter russischer Herrschaft*, Berlin: Schwarz, 1998; *Кемпер, Михаэль*. Суфии и ученые в Татарстане и Башкортостане. Исламский дискурс под русским господством [пер. с нем. *Гилязова, Искандера А.*]. Казань: Российский исламский университет, 2008.

⑤ Frank, Allen J., *Bukhara and the Muslims of Russia: Sufism, Education, and the Paradox of Islamic Prestige*, Leiden/ Boston: Brill, 2012. 村落地域のウラマーによる村史というジャンルについては、次も見よ。Frank, Allen J., *Muslim Religious Institutions in Imperial Russia: The Islamic World of Novouzensk District and the Kazakh Inner Horde, 1780-1910*, Leiden/ Boston/ Köln: Brill, 2001.

⑥ 長縄宣博「イスラーム教育ネットワークの形成と変容――一九世紀から二〇世紀初頭のヴォルガ・ウラル地域」、橋本伸也（編）『ロシア帝国の民族知識人――大学・学知・ネットワーク』、昭和堂、二〇一

四年、二九四～三二六頁。カルガルについては、次も参照。濱本真実『「聖なるロシア」のイスラーム――一七～一八世紀タタール人の正教改宗』、東京大学出版会、二〇〇九年、とくに二〇九～二三三頁。

⑦ 磯貝真澄「一九世紀後半ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域のマドラサ教育」、『西南アジア研究』七六、二〇一二年、一～三一頁; Farkhshatov, Marsil N., Isogai, Masumi, and Bulgakov, Ramil M. (eds.), *"My Biography" of Ridā' al-Dīn b. Fakhr al-Dīn (Ufa, 1323 A.H.) with an Introductory Essay and Indexes (TIAS Central Eurasian Series No. 11)*, Tokyo: NIHU Program Islamic Area Studies, The Univ. of Tokyo, 2016.

⑧ Riḍā' al-Dīn b. Fakhr al-Dīn, *Āthār* 1 nchī jild 1 nchī juz', Kazan, 1900; 2 nchī juz', Orenburg, 1901; 3 nchī juz', Orenburg, 1903; 4 nchī juz', Orenburg, 1903; 5 nchī juz', Orenburg, 1904; 6 nchī juz', Orenburg, 1904; 7 nchī juz', Orenburg, 1904; 8 nchī juz', Orenburg, 1904; 2 nchī jild 9 nchī juz', Orenburg, 1905; 10 nchī juz', Orenburg, 1905; 11 nchī juz', Orenburg, 1905; 12 nchī juz', Orenburg, 1907; 13 nchī juz', Orenburg, 1907; 14 nchī juz', Orenburg, 1908; 15 nchī juz', Orenburg, 1908. リザエッディンは第三～四巻も執筆したが、それを出版することはできなかった。その手稿は現在、ロシア科学アカデミー・ウファ学術センター学術文書館（Научный архив при Уфимском научном центре Российской академии наук）が所蔵する。また、近年、カザンの研究者が現代タタール語およびロシア語訳を刊行した。これは非常に多くの問題を含む抄訳だが、およその内容を知るには便利である。*Ризаэддин Фахреэдин*. Асар. 1 нче т. [фон. мех. *Госманов, Маркасый*]. Казан: Рухият, 2006; 2 нче т. – 2009; 3–4 нче т. – 2010.

⑨ Humphreys, R. Stephen. *Islamic History: A Framework for Inquiry*, Revised Edition, Princeton U. P., 1991, pp. 189–192.

⑩ 長縄「イスラーム教育ネットワークの形成と変容」、二九五頁。なお、ロシア帝国の身分制度において、正教をはじめとするキリスト教諸派の聖職者は聖職者身分を有したが、「ムスリム聖職者」は農民等の身分に属していた。

二　史　料

本稿の基本史料は、リザエッディン・ブン・ファフレッディンがテュルク語で著した、『事績』というウラマーの人名録（伝記集）である。[1] 一九〇〇～一九〇八年、彼はこれを二巻一五分冊にして刊行した。上述のように、これはヴォルガ・ウラル地域のウラマーのうち、一七～一八世紀から一八七〇年代前半に死去した者までの約四五〇名を収録するが、より正確には、さらに古い時代の人びとから始まっており、最初の見出しの人物は、アッバース朝カリフの使節団の一人として一〇世紀初頭にバグダードからブルガルに旅をした、イブン・ファドラーン（Aḥmad b. Faḍlān、生没年不詳）である。[2] ただ、伝説的要素が少なく、血縁または師弟関係という点で後の時代に繋がる人びとについての伝記的記述――史料とし

て、一定程度信頼できる記述――は、一七世紀末頃に死去した世代あたりからである。

この『事績』を、リザエッディンはイスラームの学術文化における人名録の伝統を十分に意識して執筆した。彼は第一巻の序文で、「歴史〔学〕と、その一分野である伝記（tarjama）および系譜（nasab）の諸学が限りなく有益であることを、洞察力と注意力を備えるウラマー（ʿālimlar）であれば誰しも否定できない」と述べ、さらに「イスラームのウラマー（islām ʿulamāʾsi）によって全体史（ʿumūmī taʾrīkh）が編集されたのと同じく、人名録（tarājim）や世代別人名録（ṭabaqāt）に属するような諸情報が、全体史とは別個に編集されたのである」と記している。[3]

リザエッディンがイスラーム的な人名録の伝統を踏まえていたことは、『事績』の本文の叙述スタイルからも理解できる。それは、人物ごとに、原則として死亡年の昇順で見出しを立て、順序立てて簡潔な内容の伝記を記していくというものである。もっとも、人物の見出しに番号を振ったり、改行や句読点を使ったりして叙述する点は、近代的な文章の規範に則ったものと言えるだろう。いずれにせよ、一例として、見出し番号一三六の Ṣāliḥ b. Saʿīd b. al-Ḥasan al-Kīlī というウラマーの記述を示せば、それは次のようになる。

一三六）Ṣāliḥ b. Saʿīd b. al-Ḥasan al-Kīlī。カザン市の第二石造モスクのイマームおよびムダッリスであり、〔ヒジュラ暦〕一二四〇年に死去した。墓はカザンの墓地にある。出自はカザン郡（muḍāfat）のキリ（Kīlī）村である。ʿAbd al-Salām b. Ḥasan al-Qārīlī のもとで勉学に励んだ後、ブハラに行き、ʿAṭāʾ b. Hādī al-Bukhārī、およびその他の人びとから学問の益を得た。〔ヒジュラ暦〕一一九九年にブハラから戻り、イスケ・ケネル（Īskī Kinār）村で教授に従事した。そこからカザンに移り、いくつかの大きなマドラサで〔職を〕得て、教授に従事した。子：ʿAbd al-Walī、ʿAbd al-Ghanī、ʿAbd al-Sattār という名であり、現在では家系は絶えている。弟子：ʿAbd al-Sattār b. Saʿīd、ʿAbd al-Ghaffār b. Saʿīd、Maqṣūd b. Qurbān-ʿAlī al-Kūlbāshī、Ḥusn al-Dīn b. Ibrāhīm al-Ānāchī、Fatḥ Allāh b. Ṣafar al-Manāwizī、ʿAbd al-Salām b. Murtaḍā al-Muslimī、他。〔本人は〕大柄な体格で、〔質問に対する〕返答が早く、機知

に富む話し方の、洗練された服装〔の人物〕であり、多くの弟子（shākird）を持ったと伝えられる。④……

つまり、個別の伝記の記述内容は原則として、名、主たる職、死亡年（生年が知られていれば、生没年）、埋葬地、出自等の後で、師匠の名を中心とする学問歴、さらに教授歴が続くというものである。学問歴や教授歴では、マドラサの所在地よりも、師匠や弟子の名の方が丁寧に記載される傾向がある。この事例のように子の名が知られていれば書かれ、妻の名の記載もみられるが、多くの場合、それよりも師匠や弟子の名の方が注意を払われる。こうした叙述スタイルからも、リザエッディンがイスラームの人名録の伝統を意識していたことが感じられるのである。⑤また、ヴォルガ・ウラル地域では、上述のメルジャーニーがリザエッディンに先行し、『カザンとブルガルに関する有益な情報』に加えて、『祖先への忠孝と子孫への祝意（*Wafīyat al-aslāf wa tahīyat al-akhlāf*）』という人名録をアラビア語で著していた。⑥リザエッディンには、中世のアラブ・ムスリムによる人名録以上に、メルジャーニーの著作が身近な先例だった。

すなわち、『事績』は、上述のように、中世の人名録の史料としての利用法を踏まえれば、これに基づいてウラマーによる学問のための移動や人的ネットワーク形成の様相を研究できるものである。さらに、リザエッディン自身がとくにウラマーの師弟関係の系譜を記録する意図を持ってこれを執筆したことも、そうした研究を容易にする。彼は『事績』第一巻の序文で、次のように書いた。

……〔ウラマーの伝記を〕年代に基づき編さんしたことについて、私の意図および理由は、先代の者らが、学識において完全な者であれ、不完全な者であれ、後代の者らにとっての師匠の関係にあるためである。この師弟関係を記録・保存（ḥifẓ wa riʿāyat）すること、学識の鎖が誰から誰に継承されたのかを知ること、……〔こうした事柄〕が私の心を強固に占めており、このため私は過ぎ行く年代に従って編さんすることを選んだのである。⑦

『事績』が史料として一定程度信頼できるものであることを確認するため、リザエッディンが執筆に使った資料について、ごく簡単に説明しておきたい。この問題を精力的に研究したL・バイブラートヴァがまとめる情報に基づき[8]、これまで筆者が確認した、リザエッディン自身による『事績』中の記述や、ウファ、サンクト・ペテルブルク、カザンの文書館等の所蔵文書を参考にすれば、『事績』の資料は主として、次の六種のものだったと言える。

①メルジャーニーの著作『カザンとブルガルに関する有益な情報』および『祖先への忠孝と子孫への祝意』。

②オレンブルク・ムスリム宗務協議会（Оренбургское магометанское духовное собрание）の文書庫所蔵の文書類…一八九一～一九〇六年、リザエッディンは、ムスリム司法・行政機関である宗務協議会にカーディー（委員 член）として勤務し、その文書庫にも出入りしていた。そのため、彼は『事績』の執筆に宗務協議会文書を使うことができた[9]。

③墓碑銘…リザエッディンはウラマーの墓の墓石に彫られた銘文を収集し、『事績』執筆に利用した[10]。

④イスラーム諸学等の写本にみられる筆写人の記録…ヴォルガ・ウラル地域で（または、地域の出身者によって）作成された写本の多くは、マドラサの学生によって勉学のために筆写されたイスラーム諸学等の書物である。しばしば、筆写した学生が写本の末尾等に自らについての記録を残した。たとえば、名、筆写終了時の日付、師匠の名やマドラサの所在地等である。リザエッディンはそれらを読み、『事績』の資料とした[11]。

⑤ウラマーからリザエッディンに書き送られた書簡…リザエッディンは、宗務協議会管下のムスリムの教区（приход, maḥalla）でイマーム等の職務にあるウラマーに書簡を出したり、自ら編集・発行する雑誌『シューラー（*Shūrā*）』（オレンブルク、一九〇八～一九一七年）に告知を載せたりして、『事績』執筆のための情報を求めた。それに応えてウラマーから送られた書簡を、彼は資料とした。また、彼の著作、とくに『事績』やその他の伝記作品の読者であるウラマーが、自発的に彼に書簡を送り、情報を伝えてくることもあった。彼はこれも利用した[12]。

⑥シェジェレ（shajara）…リザエッディンは、ウラマーの先祖を辿って名を記すのに、血縁関係の系譜が記録されたシ

エジェレを利用したと推定できる。[13]

以上のような多様な資料、とりわけ宗務協議会文書に基づくものであるため、『事績』は史料として一定の信頼性を持つものと言えるだろう。本稿はこの第一巻を利用する。

① ウラマーではない人びとについての伝記的記述も一部、含んでいる。

② Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(1), pp. 20–21 (no. 1). 以下、『事績』についての参照表示では、たとえば「*Āthār* 1(1)」は『事績』第一巻第一分冊を指し、当該の人物の見出しに振られている番号を、丸括弧で括ってページ数に添えることとする。また、イブン・ファドラーンについては、イブン・ファドラーン（家島彦一・訳注）『ヴォルガ・ブルガール旅行記（東洋文庫七八九）』、平凡社、二〇〇九年。

③ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(1), p. 2.

④ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(4), pp. 203–204 (no. 136). AH一二四〇年は一八二四／二五年、AH一一九九年は一七八四／八五年である。キリ村とは、現タタルスタン共和国バルタスィ地区キレエヴォ村を指すだろう。後述するが、このウラマーは、'Abd al-Salām b. Ḥasan al-Qārīī に師事したとの記述から、勉学のためにカレリノ村（現タタルスタン共和国バルタスィ地区）に行ったと推定できる。イスケ・ケネル村は、現タタルスタン共和国アルスク地区スタールイ・キネル村である。また、ムダッリスとは、マドラサの教師である。

⑤ ハンフリーズが紹介する、一二～一三世紀のアンダルス地方の人名録の例と比較されたい。Humphreys, *Islamic History*, p. 190. また、谷口淳一「人物を伝える――アラビア語伝記文学」、林佳世子・桝屋友子（編）『記録と表象――史料が語るイスラーム世界（イスラーム地域研究叢書八）』、東京大学出版会、二〇〇五年、一一三～一四〇頁、とくに一三二～一三六頁も見よ。

⑥ これについては、テキストの一部のロシア語訳を含む、次の研究を見よ。*Юзеев, Айдар Н.* Очерки Марджани о восточных народах. Казань: Татар. кн. изд-во, 2003.

⑦ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(1), p. 8.

⑧ *Байбулатова, Лилия Ф.*«Асар» Ризы Фахреддина: источниковая основа и значение свода. Казань: Татар. кн. изд-во, 2006.

⑨ *Байбулатова.* «Асар» Ризы Фахреддина, С. 60–61, 76–87. 宗務協議会文書は現在、バシコルトスタン共和国国民文書館（旧バシコルトスタン共和国立中央歴史文書館）に所蔵される。Национальный архив Республики Башкортостан, Ф. И–295: Оренбургское магометанское духовное собрание. 宗務協議会について、簡潔な解説は次を見よ。長縄宣博「近代帝国の統治とイスラームの相互連関――ロシア帝国の場合」、秋田茂・桃木至朗（編）『グローバルヒストリーと帝国』、大阪大学出版会、二〇一三年、一五八～一八四頁、とくに一六〇～一六五頁。

⑩ *Байбулатова.* «Асар» Ризы Фахреддина, С. 87–91.

⑪ *Байбулатова.* «Асар» Ризы Фахреддина, С. 92–94. そうした写本の「奥付」については、M・ウスマーノフによる紹介がある。*Османов, Маркасыйм. Г.* Каурый калем эзенен. Казан: Тат. кит. нәшр., 1994, Б. 95–104.

⑫ *Байбулатова.* «Асар» Ризы Фахреддина, С. 61–67. もっとも、『ンューラー』誌を使って集めた情報は、『事績』の第二巻までには使わ

れていないはずである。手稿のまま残された第三巻以降では使われた可能性がある。

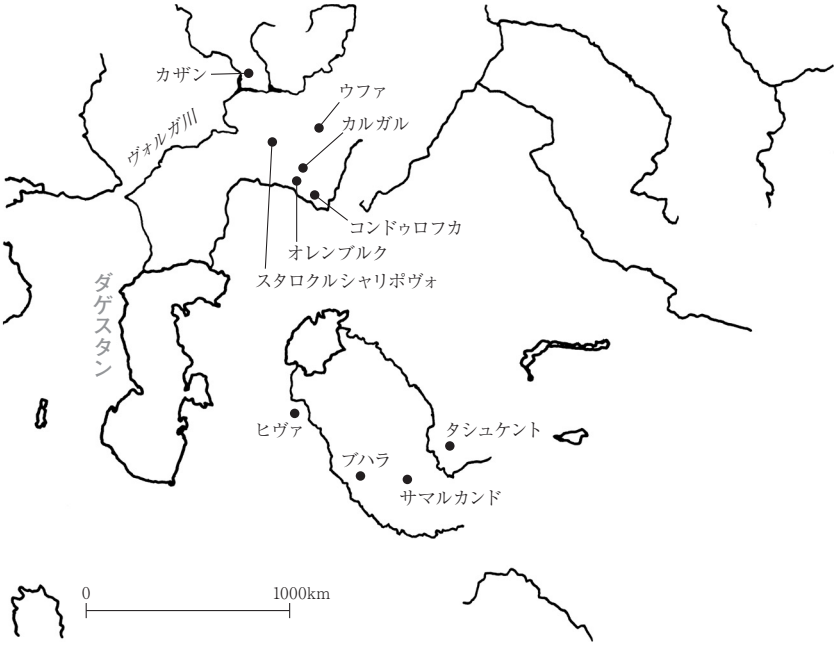
⒀ *Байбулатова*. «Асар» Ризы Фахреддина, С. 103–105. シェジェレのテキストについて、現段階で最も充実した研究は次のものである。*Булгаков, Рамиль М. и Надергулов, Мингазит Х.* Башкирские родословные. Издание второе, исправленное и дополненное. Уфа: Китап, 2016.

三　ダゲスタン遊学

『事績』を史料とする場合に一定程度信頼できる、一七世紀末頃に死去した世代の最初は、見出し番号二五の Yānsārī-ḥāfiẓ b. Bayṣārī b. Kīldish という、一六八七年（AH一〇九九年ムハッラム月）に死去した、「カザン県（tawābiʿ）オル（Ūrī）村〔現タタルスタン共和国アルスク地区ニジニャヤ・ウラ村〕」出身の人物である。『事績』第一巻の最後は見出し番号二二二の Naṣr al-Dīn b. Zaynish al-Qālmiqī という、一八四三年（AH一二五九年ラマダーン月一〇日）に死去した人物である。[1] 前者から後者まで、つまり、一七世紀後半～一九世紀前半で、見出しの立てられた者は計一九八名ということになるが、このうちダゲスタンに遊学したという記述のある者はわずか六名であり、また、ダゲスタン出身者が一名、南コーカサス出身者が一名である。この人数のみを考えるならば、ダゲスタン遊学は注目に値しないかもしれない。しかし、後述するように、ダゲスタン遊学の経験者は多くの弟子を集めたのである。したがって、まず、ダゲスタンで学んだ、またはダゲスタン出身のウラマー四名の事例を示す。

① Murtaḍā b. Quṭlighish al-Sīmitī（Murtaḍā-afandī、Murtaḍā-ḥāfiẓ、Murtaḍā-ḥājjī）…一七二三／二四（AH一一三六）年以降没。ダゲスタンに遊学し、メッカ巡礼を行なった。スィメト（Sīmit）村（現タタルスタン共和国サバ地区ヴェルフニー／ニジニー・スィメト村）で活動した。[2]

② Muḥammad b. ʿAlī al-Dāghistānī（Qāḍāqāy-ākhūnd、Qāḍī-āqāy）…一七九五／九六（AH一二一〇）年没。ダゲスタンでカーディーを務めていたウラマーであり、何らかの理由でロシアに移住した。オレンブルク県の「サクマラ川の畔のコンド



地図１　ヴォルガ・ウラル地域、ダゲスタン、中央アジア

ウラウ（Qūndurāw）、または別の伝承ではコンドゥラウ・ノガイ（Qūndurāw Nūghāy）という村〔現オレンブルク州サラクタシュ地区コンドゥロフカ村③〕でマドラサを開き、教授を続けた。④

③ Muḥammad-Raḥīm b. Yūsuf b. ʻAbd al-Karīm al-Āshiṭī…一八一七年没。アシュト（Āshiṭ）村（現タタルスタン共和国アルスク地区スタールイ／ノーヴイ・アシト村）のイマームの子で、同村のイマームを務めた後、後述の④ Ibrāhīm b. Khujāsh とともにダゲスタンに遊学した。帰郷後はメシュケレ（Machkara）村（上述の現タタルスタン共和国ククモル地区マスカラ村）でイマームとムダッリスを務めた。妻の一人は Maḥbūba、二人目は Ḥabība といい、二人とも ʻAbd al-Salām b. Ūdamīsh という商人の娘だった。⑤

④ Ibrāhīm b. Khujāsh（Afandī-ḥaḍrat）…一八二五／二六（AH一二四一）年没。「ビョゲルメ郡〔つまり、ブグルマ郡〕のザイ川の右岸にあるシャルラマ（Sharlama）という小さな村〔現タタルスタン共和国アルメティエフスク地区〕」の出身で、ヴォルガ・ウラ

ル地域内を遊学してイマームとなった後、上述の③ Muḥammad-Raḥīm al-Āshiṭī とともにダゲスタンに遊学した。帰郷し、一七八二／八三（AH一一九七）年にカザン郡ウタル（Ūtar）村（現タタルスタン共和国アルスク地区ウタル・アトィ村）のイマームとなり、その後、キシト（Kīshit）村（現タタルスタン共和国アルスク地区スタールイ／ノーヴイ・キシト村）でイマームを務めた。一七九四年（AH一二〇八年ズルカアダ月）にカザンの第一モスクのイマームとなった。妻の一人は Munawwar bt. Yūsuf b. ʻAbd al-Karīm al-Āshiṭī で、上述の③ Muḥammad-Raḥīm al-Āshiṭī の姉か妹である。[6]

以上の四名のうち、③ Muḥammad-Raḥīm al-Āshiṭī と④ Ibrāhīm b. Khujāsh が一緒にダゲスタン遊学をしたことは興味深い。① Murtaḍā al-Sīmiṭī、③ Muḥammad-Raḥīm al-Āshiṭī、④ Ibrāhīm b. Khujāsh の三名は、ダゲスタンから帰郷後、ザカザニエの村落地域でイマームを務めている。また、③ Muḥammad-Raḥīm al-Āshiṭī は商人の娘と結婚し、④ Ibrāhīm b. Khujāsh は学友であるウラマーの姉か妹と結婚している。これらの事実は、ウラマーの学友関係や婚姻関係の構築という観点から、またはザカザニエ地方の特徴という問題から考察の対象となるが、これについては後述する。

ダゲスタンに遊学したと記述される最後の人物は、見出し番号一九八の Tāj al-Dīn b. Yālchighul b. Mamat-qul（一七六八／六九～一八三八年）という、スーフィーとしての活動で知られるウラマーである。[7] ダゲスタン遊学は、一九世紀初頭に死去した世代あたりまでで終わったとみてよい。ヴォルガ・ウラル地域の人びとがダゲスタンをめざした時期それ自体は、一八世紀末か、遅くとも一九世紀初頭が最後だったと言える。[8]

① Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(1), pp. 29-30 (no. 25); Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(8), p. 479 (no. 222). 引用した文章に「カザン県」とあるのは、リザエッディンがこれを書いた一九世紀末の時点での行政区分によるものである。

② Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(2), pp. 33-36 (no. 29).

③ 一八世紀後半に存在したとされる村落には、その後失われたものもあるだろう。その意味で、『事績』に登場する村落のすべてを現存のものに同定することはできない。このことを念頭に置きつつ、この村の同定を試みれば、現在のオレンブルク州サラクタシュ地区コンドゥロフカ村を指すと推定できる。この村は、一七四五年のコンドゥロフ・ノガイ（кондуровские ногайцы、ノガイ・タタール）の移住によって作られたという。*Моисеев, Борис А.* Местные названия Оренбург-

ской области: историко-топонимические очерки. Оренбург: Изд-во Оренбург. гос. пед. ун-т., 2013, С. 153–156.

④ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(2), pp. 66–69 (no. 68).

⑤ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(3), pp. 141–144 (no. 114). 妻の父である ʿAbd al-Salām b. Ūdamīsh は、マスカラ村に出自を持つ著名な商人の家系、ウチャムィシェフ家の者だろう。長縄「イスラーム教育ネットワークの形成と変容」、二九九～三〇〇頁。

⑥ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(5), pp. 225–238 (no. 139).

⑦ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(6), pp. 336–338 (no. 198). このTāj al-Dīn b. Yālchighul については、ケムパーが詳説している。Kemper, *Sufis und Gelehrte*, pp. 98–115; *Кемпер*. Суфии и ученые, С. 152–173.

⑧ 多くの中央ユーラシア史研究者の感覚では、なぜマー・ワラー・アンナフルではなくダゲスタンだったのかという疑問が生じるかもしれない。筆者は、少なくとも三つの要因があったと考える。第一に、ダゲスタンがメッカ巡礼路に位置したことがある。第二に、このことと関連するが、ヴォルガ下流域とダゲスタンの間の人の移動が、おそらくそれなりの規模を持っていたことである。時期的に二〇年程度後のことではあるが、東洋学者ミルザ・アレクサンドル・カゼムベク（一八〇二～一八七〇年）が、ダゲスタン地方のデルベントから、やむを得ずではあるがヴォルガ下流域のアストラハンに移り、その後カザン大学教授となった例が思い起こされる。第三に、カザフ草原が、ロシア帝国の軍事・行政拠点が増えるまで縦断しづらいものだったことも想像できる。カゼムベクについては、Schimmelpenninck van der Oye, David, *Russian Orientalism: Asia in the Russian Mind from Peter the Great to the Emigration*, Yale U. P., 2010, pp. 101–109, シンメルペンニンク＝ファン＝デル＝オイェ、デイヴィド（浜由樹子・訳）『ロシアのオリエンタリズム――ロシアのアジア・イメージ、ピョートル大帝から亡命者まで』、成文社、二〇一三年、一一七～一三七頁。

四　ブハラ遊学

『事績』第一巻において、一七世紀末頃に死去した世代以降で見出しを立てられた一九八名のうち、ブハラまたは中央アジアで学んだという記述のある者は、四五名に達する。[①] そのうち最も早い時期の人物は、見出し番号三三のYūnus b. Īwānāy b. Ūsāy（Yūnus-afandī、Yūnus-ākhūnd）という、「カザン県オル（Ūrī）村〔上述のように、現タタルスタン共和国アルスク地区ニジニャヤ・ウラ村〕のイマームおよびムダッリス」である。この人物は一六三六／三七年の生まれで、「カザンのイスラーム国滅亡後、最初にマー・ワラー・アンナフル〔つまり、ブハラ・ハン国〕方面に旅をし、勉学に励んだ人物」とされる。その妻は上述のYānsārī-ḥāfiẓ b. Bayṣārī b. Kīldish の娘Yūcha-nihāl であり、実のところ、彼らは軍務タタール（служилые татары）に繋がる血筋を持つと推定される一族か、またはその姻族である。いずれにせよ、彼らの活動地だった、現

在のニジニャヤ・ウラ村は、歴史的には軍務タタールのポメスチエ（поместье、封地）として、「軍務〔タタール〕のウラ（Служилая Ура）」と呼ばれたところである。[2] このことから、ヴォルガ中流域におけるイスラームの学術文化の展開と軍務タタールとの関連が推定されるのだが、この問題については後述する。

とはいえ、Yūnus b. Īwānāy b. Ūsāy のかなり早い例を除けば、ブハラ遊学者が増えるのは一八世紀後半のことである。ブハラで学んだウラマー四五名のうち、より早い時期の者で、経歴が比較的詳しく記述された六名の事例を次に示す。

⑤ Walīd b. Muḥammad al-Amīn b. Sulaymān（Walīd-īshān）…一八〇二／〇三（AH一二一七）年没。「テテシュ郡〔つまり、テテュシ郡〕カイブシュ（Qāybīch）村〔おそらく、現タタルスタン共和国ブインスク地区カイビツィ村〕」の出身である。上述の② Muḥammad al-Dāghistānī に師事した後、ブハラに赴き、さらにカーブルに行き、Shaykh Fayḍ-khān b. Khiḍr-khān というスーフィーの導師から免状を得て（ma'dhūn）、帰国した。その後、オレンブルク近郊のサイード町（Sa'īd qasabasi、つまり、上述のカルガルであり、現オレンブルク州サクマラ地区タタルスカヤ・カルガラ）でイマームを務め、シャイフ（スーフィーの導師）としても活動した。[3] すなわち、この人物はカザンの南西一〇〇キロメートル強に位置する村落から、現在のオレンブルク州のコンドゥロフカ村に行き（一〇〇〇キロメートル弱の旅と推測できる）、その後ブハラ（コンドゥロフカから約二〇〇〇キロメートルの旅と推測できる）、カーブルに行って、最終的に現在のオレンブルク州のタタルスカヤ・カルガラに落ち着いたことになる。

⑥ Abū al-Naṣr 'Abd al-Naṣīr b. Ibrāhīm b. Yār-Muḥammad al-Qūrṣāwī…一七七六／七七（AH一一九〇）～一八一二（一二二七年ラマダーン月一〇日）年。イスラーム改革を論じたとされることで著名なクルサヴィーである。クルサ（Qūrṣā）村（現タタルスタン共和国アルスク地区ヴェルフニャヤ・コルサ村）で生まれ、上述の③ Muḥammad-Raḥīm al-Āshiṭī のもとで学んだ後、ブハラに赴いた。ブハラではスーフィズムの修行も行ない、Shaykh Niyāz-qul b. Shāh-Niyāz al-Turkmānī というスーフィーの導師に師事した。その後、生まれ故郷の村に戻り、マドラサを開いて多くの弟子を持った。その後、再

度ブハラに行き、ヒヴァ、アストラハンを経由して故郷に戻ったという。さらに後に、メッカ巡礼のため訪れたイスタンブルで死去した。④

⑦ Ḥabīb Allāh b. Ḥusayn b. ʻAbd al-Karīm…一七六二（AH一一七六年ラマダーン月五日）～一八一八年（一二三三年ラマダーン月一日）。上述の Yānsārī-ḥāfiẓ b. Bayṣārī b. Kīldish の子孫、つまり、軍務タタールに繋がる血筋を持つと推定される一族の出身である。ブハラで ʻAṭā' Allāh b. ʻAbd al-Hādī というウラマーに師事し、カーブルに行って上述の Shaykh Fayḍ-khān b. Khiḍr-khān というスーフィーのもとで修業した。帰国後は上述のウラ村のイマームを務め、多くの弟子を育てた。妻は、ウラ村の Raḥmat Allāh b. Tūqtāmish b. Muslim という商人の娘、Zubayda である。⑤

⑧ Ṣāliḥ b. Saʻīd b. al-Ḥasan al-Kīlī…一八二四／二五（AH一二四〇）年没。先に『事績』からの引用文を提示した人物である。出自は現在のタタルスタン共和国バルタスィ地区キレエヴォ村であり、その隣村である、現在のタタルスタン共和国バルタスィ地区カレリノ村のマドラサで学んだと推定できる。その際の師匠は ʻAbd al-Salām b. Ḥasan al-Qārīlī というウラマーである。その後、ブハラで ʻAṭā' b. Hādī al-Bukhārī（おそらく上述の ʻAṭā' Allāh b. ʻAbd al-Hādī）というウラマーに師事した。帰国後は、現在のタタルスタン共和国アルスク地区スタールイ・キネル村で教えた後、カザンのマドラサで教授を続けた。⑥

⑨ Amīr-khān b. ʻAbd al-Mannān b. Ismāʻīl al-Tālqishī…一八二八／二九（AH一二四四）年没。上述の③ Muḥammad-Raḥīm al-Āshiṭī の弟子であり、つまり、まずはマスカラ村で学んだと推定できる。ブハラに行き、帰国後は、クルサ（Qūrṣā）村（上述した現ヴェルフニャヤ・コルサ村）、次にティメルシュク（Timir-shaykh）村（現タタルスタン共和国サバ地区ティメルシク村）、さらにテョレク（Turk）村（おそらく、現マリ・エル共和国マリ・トゥレク地区マリ・トゥレク村）でイマームを務め、最後はカザンの第六モスクのイマームとなった。妻は、師匠である③ Muḥammad-Raḥīm al-Āshiṭī の娘、ʻAzīza である。⑦ つまり、この人物がブハラから帰国した後にイマームを務めた村々はすべてザカザニエ地方に位置する。ヴェルフニャ

ヤ・コルサ村とティメルシク村は約二五キロメートル、ティメルシク村とマリ・トゥレク村は約一〇〇キロメートル、そしてマリ・トゥレク村とカザンは約一五〇キロメートル離れている。

⑩ Shams al-Dīn b. ʻAbd al-Rashīd b. ʻUthmān…一八三二／二三三（AH一二四八）年没。出自はクシュカル（Qishqār）村（上述の現タタルスタン共和国アルスク地区クシュカル村）であり、おそらくタシュキチュ（Tāshkīchū）村（現タタルスタン共和国アルスク地区）でʻAbd al-Salām b. ʻAbd al-Raḥmān b. ʻAbd al-ʻAzīz al-Qūrṣāwī というウラマーのもと学んだ後、ブハラでʻAṭāʾ Allāh b. Hādī al-Bukhārī に師事した。帰国後はタシュキチュ村で教授に従事した。その後、メッカ巡礼に赴き、カイロで死去したとされる。[8]

以上の六名のうち、⑥ Abū al-Naṣr ʻAbd al-Naṣīr al-Qūrṣāwī、⑦ Ḥabīb Allāh b. Ḥusayn、⑧ Ṣāliḥ al-Kīlī、⑨ Amīr-khān al-Tālqishī、⑩ Shams al-Dīn b. ʻAbd al-Rashīd の五名は、まずザカザニエ地方のウラマーのもとで学んだか、または学んだと推定でき、その後にブハラに行っている。そして、五名全員がブハラ遊学後にザカザニエ地方の村落地域で教授に従事し、弟子を養成している。実際、ブハラ遊学経験者四五名のうち、帰国後にザカザニエ地方で活動した者は一八名である。この一八名のうち五名は、カザンでも活動している。また、それ以外に、ブハラ遊学後にカザンで活動した者が五名いる。つまり、ブハラ遊学経験者四五名のうち、カザンまたはザカザニエ地方の村落地域でイマームやムダッリスとして活動した者は二三名に達する。後述するように、彼らがさらに弟子を集めたため、ブハラの学統はザカザニエの村落地域で継承されたと言えるだろう。

ところで、⑤ Walīd b. Muḥammad al-Amīn は、ブハラ遊学後にカルガル（現オレンブルク州タタルスカヤ・カルガラ）で活動している。すでに述べたように、一七四〇年代、ロシア政府がオレンブルクを建設したのと同時期に、ヴォルガ中流域から移住したタタール商人がその近郊にカルガルという町を形成した。そして、通説では、カルガルのウラマーに師事するため、ヴォルガ中流域からそこに学生が集まり始め、それがブハラをめざす遊学者の流れに結びついたとされる。ここ

で一応、カルガルへの遊学についても確認しておく。最も早い時期にカルガルで学んだ人物は、Sa'īd b. Ibrāhīm b. 'Abd Allāh al-Bārishī（一八一四年没）というウラマーである。⑨

『事績』第一巻で見出しを立てられた一九八名のうち、カルガルで学んだ者は二三名を数えることができる。このうち、ブハラにも行った者は七名である。カルガルでの勉学が、必ずしもブハラ遊学を導いたわけではないと言えそうである。カルガル遊学経験者二三名のうち、その後ザカザニエ地方の村落地域で活動した者は一〇名である。カルガルでの勉学の後にカザンで活動した者は三名であり、このうちザカザニエでの活動経験も持つ者は一名である。さらに言えば、ブハラとカルガルの両方で学んだ経験を持つ七名のうち、後にザカザニエ地方またはカザンで活動した者は四名である。

『事績』にあらゆる情報が含まれるわけではないため、これらの数字はかなり大雑把な傾向を示すものと考える必要があるが、このことに留意するとしても、次の事柄は言えそうである。すなわち、とくに一八世紀後半、カルガルの存在に必ずしも関係なく、ザカザニエ地方の村落地域にはブハラ遊学を経験し、その学問伝統を受け継ぐウラマーが増え始めた。それに少し遅れて、カルガルの学統を継承するウラマーも現れ始めた。ブハラで学んだ後にカルガルで教授する⑤ Walīd b. Muḥammad al-Amīn のような人物の弟子は、カルガルのウラマーを経由してブハラの学統を継承したとみなされるだろう。

ちなみに、ザカザニエ地方とカルガルは最初から、つまりウラマーの移動とは直接関係なく、そもそもカルガルの町の成立経緯自体において、結びついていた。一七四四～一七四五年にカルガルを創建し、タタール商人として中央アジア貿易の基礎を築いたサイード・ハヤーリン（Sa'īd b. Āyiṭ ('Īd) Khayālīn）は、ザカザニエ地方のサバ（Ṣabā）村（現タタルスタン共和国サバ地区ボガティエ・サブィ）出身だった。そして、彼とほぼ同時に移住した人びとの約半数が、ザカザニエ地方の出身者だったのである。⑩

① 小松は、メルジャーニーが『カザンとブルガルに関する有益な情報』で記した、カザンとカザン地方のモスクのイマーム一八七名のうち、ブハラ留学経験者は五〇名であると述べる。小松「ブハラとカザン」、四八二頁。

② Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(2), pp. 38–40 (no. 33); *Сапиков, Радик Р.* Служилая Ура: рождение татарского капитализма. Казань: Инст. ист. АН РТ, 2015. 小松「ブハラとカザン」、四八三頁も参照。軍務タールについては、濱本『「聖なるロシア」のイスラーム』が詳しい。

③ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(2), pp. 76–78 (no. 81). Fayḍ-khān b. Khiḍr-khān というスーフィーは、一八〇二年（AH一二一七年ムハッラム月一日）にカーブルで死去したとされる人物で、ヴォルガ・ウラル地域のブハラ遊学者がカーブルまで足を伸ばし、スーフィズムの修行をした時の師匠として知られる。ナクシュバンディーヤ・ムジャッディディーヤの導師とされる。Kemper, *Sufis und Gelehrte*, pp. 92–94; *Кемпер.* Суфии и ученые, С. 143–146.

④ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(3), pp. 95–130 (no. 98); Kemper, *Sufis und Gelehrte*, pp. 225–243; *Кемпер.* Суфии и ученые, С. 314–337. 小松「ブハラとカザン」、四八九～四九〇頁も見よ。Niyāz-qul b. Shāh-Niyāz al-Turkmānī（一八二一年没）というスーフィーは、ヴォルガ・ウラル地域のブハラ遊学者がブハラでスーフィズムの修行をした時の師匠として知られる。やはりナクシュバンディーヤ・ムジャッディディーヤの導師である。Kemper, *Sufis und Gelehrte*, pp. 90–92; *Кемпер.* Суфии и ученые, С. 141–143.

⑤ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(3), pp. 144–149 (no. 116); *Сапиков.* Служилая Ура, С. 28–32.

⑥ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(4), pp. 203–204 (no. 136). カレリノ村の ʿAbd al-Salām b. Ḥasan al-Qārīlī の師匠の、さらに師匠が① Murtaḍā al-Sīmirī である。つまり、⑧ Ṣāliḥ al-Kilī は、① Murtaḍā al-Sīmirī の曾孫弟子である。Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(2), p. 38 (no. 32); pp. 51–52 (no. 46).

⑦ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(5), p. 250 (no. 149).

⑧ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(6), pp. 276–277 (no. 170); 1(3), pp. 154 (no. 120).

⑨ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(3), pp. 133–134 (no. 101).

⑩ Riḍā' al-Dīn b. Fakhr al-Dīn, *Sa'ād*, Kazan, 1897, p. 4–5; 濱本『「聖なるロシア」のイスラーム』、二一〇～二一五頁。

五　ヴォルガ・ウラル地域におけるダゲスタンおよびブハラの学統

ヴォルガ・ウラル地域からダゲスタン、または中央アジア、とくにブハラへと、イスラーム諸学の知識を求めたウラマーは、これまで示した事例のような人びとだった。ここでさらに、彼らがどのような弟子を養成し、その弟子が「ムスリム聖職者」であるイマームやムダッリスとしてどこで活動したのか、以下に事例を提示する。ダゲスタン遊学者の弟子については、上述の① Murtaḍā al-Sīmirī と② Muḥammad al-Dāghistānī の事例を挙げる。ブハラ遊学者の弟子としては、⑧

Ṣāliḥ al-Kūlī の事例を示す。いずれも、『事績』で比較的多くの弟子の名が挙げられ、そうした弟子の経歴も詳しく記述された人びとである。なお、彼らの見出し項目には、次に示す弟子とは異なる名も記載されるが、経歴の判明する人物のみを示す。

① Murtaḍā al-Sīmiṭī…ダゲスタンに遊学し、スィメト村、つまりザカザニエ地方で弟子を養成した。

(1) Manṣūr b. ʻAbd al-Raḥmān b. Anas al-Burindiqī…一七二六／二七年（AH一一三九）年以降没。「ゾヤ（Ḍiyā'）郡〔つまり、スヴィヤシスク郡〕ボルンドゥク（Burindiq）村〔現タタルスタン共和国カイビツィ地区ブルンドゥキ村〕」出身で、① Murtaḍā al-Sīmiṭī に師事した後、ブハラに遊学した。帰国後マドラサを運営して多くの弟子を集めた。ただし、そのマドラサの所在地は判然としない。

(2) Rafīq b. Ṭayyib al-Qūrṣāwī…出身地は不明だが、クルサ村でイマームとムダッリスを務めた。

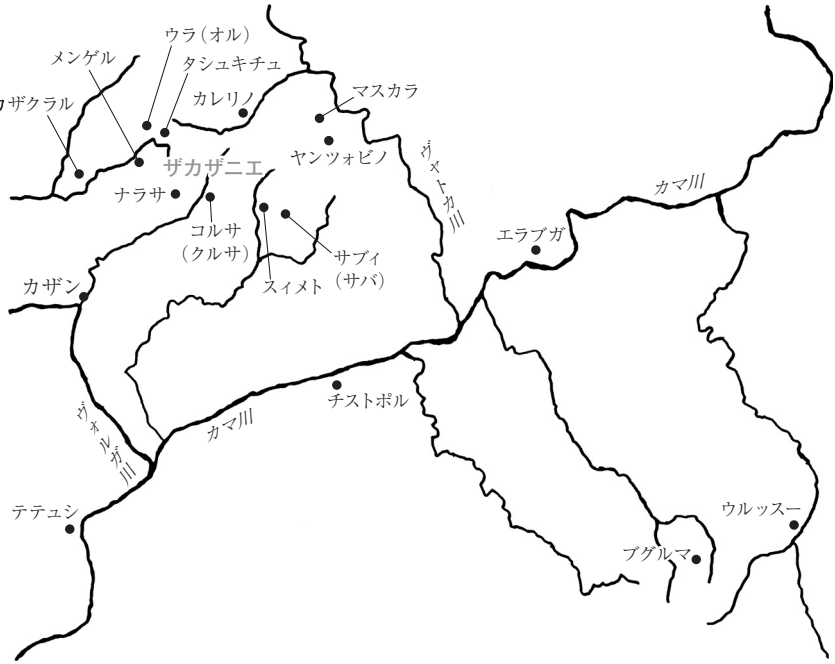
(3) al-Muḥammad b. Sūkāy b. Āytūghān…一七四二年（AH一一五五年ジュマーダーII月二〇日）没。「山地地方（Ṭāw yāghi）のシメク（Shimak）村〔おそらく、現タタルスタン共和国アパストフ地区シェミャコヴォ村〕」で活動した。

(4) ʻAbd al-Salām b. Ūrāz-Muḥammad (Ūrāy) b. Qul-Muḥammad…一七四二／四三（AH一一五五）年以降没。出自は「カザン郡のアラト道（Ālāt yūlī）沿いにあるメンゲル（Mingār）という村〔現タタルスタン共和国アトニャ地区ボリショイ／スタールイ・メンゲル村〕」であり、上述のタシュキチュ村でイマームとムダッリスを務めた。

(5) Murtaḍā b. ʻAlī b. Yūsuf…一七四四／四五（AH一一五七）年没。「スィンビル県（つまり、シムビルスク県）ビズネ（Bizna）村〔現タタルスタン共和国ドロッジャノフ地区タタルスカヤ・ベズドナ村〕」のイマームを務めた。

(6) ʻAbd al-Rashīd b. Qadar-Muḥammad…一七九三／九四（AH一二〇八）年以降没。「カザン県サトゥシュ（Ṣātish）村〔現タタルスタン共和国サバ地区サトゥイシェヴォ〕」とサバ村でイマームを務め、ムダッリスとして活動した。①

② Muḥammad al-Dāghistānī…ダゲスタン出身で、コンドゥラウ村、つまりカザフ草原北端（ウラル南麓の南端）で弟子を養



地図２　ヴォルガ中流域の村落

成した。

(1) ʻAbd Allāh b. Muslim b. ʻAlī b. al-Muḥammad…一七九四／九五（ＡＨ一二〇九）年没。「ヴェルフネウラリスク（Vrkhūrāl）とトロイツク（Trūyiskī）の間の……アフンド（Ākhūnd）村〔おそらく現チェリャビンスク州だが、同定困難〕」で活動した。

(2) 上述の⑤ Walīd b. Muḥammad al-Amīn。Muḥammad al-Dāghistānī に師事した後、ブハラとカーブルに行き、帰国後はカルガルでイマームを務め、スーフィーとしても活動した。

(3) Subḥān-qul b. Bīk-Muḥammad b. Yūldāsh…一八〇八／〇九（ＡＨ一二二三）年没。リザエッディンの曾祖父である。キチュチャト（Kīchūchāt）村（現タタルスタン共和国アルメティエフスク地区キチュチャトヴォ村）出身であり、Muḥammad al-Dāghistānī に師事した後、トゥベン・チュルシュル（Tūbān shilchiīī）村（現タタルスタン共和国レニノゴルスク地区ニジニエ・チェルシルィ村）のイマームを務めた。つまり、ウラル南麓（ヴォルガ中流域の

南東部とも言える）で活動した人物である。

(4) Niʿmat Allāh b. Raḥmat Allāh b. Īmān-qul…一八一五／一六（AH一二三一）年没。Muḥammad b. ʿAlī al-Dāghistānī のみならず、後述の(7) ʿAbd al-Raḥmān b. Muḥammad-sharīf al-Kirmānī にも師事した。「カザン郡ナラサ（Nālasa）村〔現タタルスタン共和国アルスク地区〕」のイマームとムダッリスを務めた。つまり、この人物はカザフ草原北端（ウラル南麓の南端）で学んだ後、ザカザニエ地方で職に就いた。

(5) Mūsā b. ʿAbd al-Rashīd b. Ūtagān al-Tūntārī…一八一五／一六（AH一二三一）年没。出自はテュンテル（Tūntār）村（現タタルスタン共和国バルタスィ地区）であり、上述の ʿAbd al-Salām b. Ḥasan al-Qārīlī というカレリノ村のウラマーのもとでも学んだ。メムセ（Mamsa）村（現タタルスタン共和国アルスク地区マムスィヤ村）のイマームとなった。つまり、この人物はザカザニエ地方とカザフ草原北端で学び、ザカザニエ地方でイマームを務めたことになる。

(6) Muḥammad-jān b. al-Ḥusayn b. ʿAbd al-Raḥmān…一八二四年（AH一二三九年ズルヒッジャ月二日）没。宗務協議会の初代ムフティー、ムハンメドジャン・フサイノフである。「ウファ郡のフッラム・アーバード（ソルタナイ）村〔現バシコルトスタン共和国アスキン地区スルタナイ村〕」、つまりウラル南麓出身であり、Muḥammad b. ʿAlī al-Dāghistānī に師事するのみならず、カルガルでも学んだ後、ブハラとカーブルに赴いた。ブハラでは上述の ʿAṭā' Allāh b. Hādī、カーブルでは上述のスーフィーの導師である Fayḍ-khān b. Khiḍr-khān のもとで学んだと伝えられる。

(7) ʿAbd al-Raḥmān b. Muḥammad-sharīf al-Kirmānī…一八二六／二七（AH一二四二）年没。出自は「ハンキルメン（Khān-Kirmān）にあるヤウバシュ（Yaw-bāsh）村〔現リャザン州カスィモフ地区ボロッツィ村〕」、つまり、かつてカスィモフ皇国に属していた、カスィモフ近郊の村である。カルガルでも学び、結局カルガルの第一モスクのイマームとなった。

(8) Muḥammad-Ḥanīfa b. Ṣāliḥ b. Sulūk…一八二七／二八（AH一二四三）年没。「ベレベイ郡ボガドゥ（Būghādī）村〔現バシコルトスタン共和国ブズディヤク地区スターリエ・ボガドゥイ村〕」、つまりウラル南麓において、おそらくイマームを務

めた。②

⑧Ṣāliḥ al-Kīlī…ブハラに遊学し、帰国後はザカザニエ地方とカザンで弟子を養成した。ブハラ遊学の前にザカザニエ地方で学んでいたと推定できる。

(1)ʻAbd al-Salām b. Murtaḍā b. Maqṣūd…一八二五／二六（AH一二四一）年没。出自は「ママドゥシュ（Mamādish）郡ウシュマ（Ūshma）村〔現タタルスタン共和国ママディシュ地区ヴェルフニャヤ／ニジニャヤ・オシュマ〕」であり、「ミンゼレ（Mīnzala）郡ミョスリム（Muslim）村〔現タタルスタン共和国ムスリュモフ地区ムスリュモヴォ村〕」で教授に従事した。

(2)ʻAbd al-Sattār b. Saʻīd b. Aḥmad al-Shirdānī…一八三〇年（AH一二四六年ラビーウI月一四日）没。Ṣāliḥ al-Kīlī をはじめとするザカザニエのウラマーに師事した後、ブハラに遊学した。ブハラ・アミール国で、君主のアミール・ハイダル（Amīr Ḥaydar、位一八〇〇～一八二六年）と姻族としての繋がりを作ったという。帰国後、カザンでイマーム職に就いた。ニジニー・ノヴゴロドのマカリエフの定期市（Makāriya bāzārī）でもイマームを務めた。

(3)ʻAbd al-Ghaffār b. Saʻīd b. Aḥmad al-Shirdānī…一八三〇年（AH一二四六年ラビーウI月一四日の一週間後）没。上述の⑧(2)ʻAbd al-Sattār al-Shirdānī の兄弟であり、やはりザカザニエ地方のウラマーに師事した後でブハラに遊学した。アミール・ハイダルの前で行なった論争を著作にし、アミールに献呈して褒美を得たという。帰国後、カザンでイマームを務め、弟子を養成した。

(4)Ḥusn al-Dīn b. Ibrāhīm b. Bīk-Muḥammad al-Ānāchī…一八四四年（AH一二六〇年ラジャブ月一七日）没。「ベレベイ郡アナチュ（Ānāch）村〔村落の同定は困難〕」、つまりウラル南麓でイマームとムダッリスを務めた。

(5)Fatḥ Allāh b. Ṣafar-ʻAlī b. al-Ḥusayn al-Manāwizī…一八五二年（AH一二六九年ラビーウI月）没。出自は「ベレベイ郡メネウズ（Manāwiz）村〔おそらく現バシコルトスタン共和国ミヤキ地区メネウズタマク村〕」であり、カザン郡のカザクラル（Qazāqlar）村（現タタルスタン共和国アルスク地区）のイマームとムダッリスを務めた。

(6) Maqṣūd b. Qurbān-ʻAlī b. Adanī-qul al-Kūlbāshī…一八五七年（AH一二七四年サファル月）没。カザン近郊のヘエルビ（Khayr-bī）村（現タタルスタン共和国ライシェフ地区キルビ村）の出身であり、カザン郡のキョルバシュ（Kūlbāsh）村（現タタルスタン共和国ゼレノドルスク地区ボリシエ・クリバシ村）やウラズル（Ūrāzlī）村（おそらく現タタルスタン共和国ゼレノドルスク地区ウラズラ村）をはじめ、多くの村で弟子を養成したとされる。[3]

上述の① Murtaḍā al-Sīmiīī の弟子六名のうち、①(2) Rafīq al-Qūrṣāwī、①(4) ʻAbd al-Salām b. Ūrāz-Muḥammad、①(6) ʻAbd al-Rashīd b. Qadar-Muḥammad の三名はザカザニエ地方の村落において、①(3) al-Muḥammad b. Sūkāy と①(5) Murtaḍā b. ʻAlī の二名は、歴史的に「山地地方（Горная сторона）」と呼ばれた、カザン南西のヴォルガ川右岸で活動している。ザカザニエ地方と山地地方はいずれも、カザン・ハン国時代にさかのぼるとされる古い村落が多い地域である。ダゲスタンで学んだ① Murtaḍā al-Sīmiīī の学統が、ザカザニエ以外の地方にも継承されたことがわかる。

② Muḥammad al-Dāghistānī の弟子八名のうち、ザカザニエ地方で弟子を養成したのは、②(4) Niʻmat Allāh b. Raḥmat Allāh と②(5) Mūsā al-Tūntārī の二名である。弟子の活動地について比較すると、② Muḥammad al-Dāghistānī は、① Murtaḍā al-Sīmiīī とは異なる特徴を持つ。つまり、② Muḥammad al-Dāghistānī の弟子には山地地方で職に就いた者がおらず、かわりにウラル南麓において、②(3) Subḥān-qul b. Bīk-Muḥammad と②(8) Muḥammad-Ḥanīfa b. Ṣāliḥ が活動している。また、⑤ Walīd b. Muḥammad al-Amīn と②(7) ʻAbd al-Raḥmān al-Kirmānī はカルガルで弟子を養成した。この相違はおそらく、地理的な近さによって生じたものと推測できる。

しかし同時に、②(5) Mūsā al-Tūntārī は故郷がザカザニエ地方にあるにもかかわらず勉学のためにカザフ草原北端まで移動しており、その距離は約九〇〇キロメートルである。このことは、ダゲスタンの学統というものが極めて重視されたことを物語るだろう。②(6) Muḥammad-jān b. al-Ḥusayn、つまり宗務協議会の初代ムフティーであるムハンメドジャン・フサイノフの師匠の名に② Muḥammad al-Dāghistānī がみえることも、ダゲスタンの学統の重要性を示すだろう。ちなみ

に、リザエッディンも曽祖父②(3) Subḥān-qul b. Bīk-Muḥammad の系譜において、ダゲスタンに繋がっている。

とはいえ、先行研究で指摘されるように、ダゲスタンで学んだウラマーに師事した弟子がさらなる勉学を志す場合、もはやダゲスタンには行かず、むしろブハラを選ぶようになった傾向も読み取ることができる。①(1) Manṣūr al-Burindiqī や⑤ Walīd b. Muḥammad al-Amīn、②(6) Muḥammad-jān b. al-Ḥusayn がその例である。

さて、ブハラに遊学した⑧ Ṣāliḥ al-Kūlī の弟子六名のうち、⑧(2) ʻAbd al-Sattār al-Shirdānī、⑧(3) ʻAbd al-Ghaffār al-Shirdānī、⑧(5) Fatḥ Allāh al-Manāwizī、⑧(6) Maqṣūd al-Kūlbāshī の四名が、カザンまたはザカザニエ地方で活動した。⑧(2) ʻAbd al-Sattār al-Shirdānī と⑧(3) ʻAbd al-Ghaffār al-Shirdānī の兄弟は、彼ら自身がさらにブハラに遊学しており、帰国後はカザンで職に就いて弟子を養成した。一八世紀後半～一九世紀初頭、カザンおよびザカザニエ地方とブハラの間には、強固な学問的紐帯が形成されつつあったと言えるだろう。イスラームの学術文化の「本場」としてのブハラの権威も、高まりつつあったと推測できる。

① Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(2), pp. 36–37 (no. 30); p. 38 (no. 32); p.40 (no. 34); p. 42 (no. 37); p. 43 (no. 38); pp. 62–63 (no. 65).

② Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(2), pp. 64–66 (no. 67); pp. 76–78 (no. 81); pp. 83–86 (no. 90); 1(3), p. 136 (no. 105); p. 137 (no. 106); 1(4), pp. 181–200 (no. 133); 1(5), pp. 241–246 (no. 143); p. 249 (no. 146). カスィモフ皇国については、濱本『聖なるロシア』のイスラーム』、一二七～一六一頁を参照。

③ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(5), p. 225 (no. 138); pp. 258–259 (no. 155); pp. 259–260 (no. 156); 2(10), pp. 102–103 (no. 230); 2(11) pp. 222– 226 (no. 298); 2(12), p. 281 (no. 338).

六　ヴォルガ・ウラル地域内における学問の旅と人的ネットワーク

これまで本稿は基本的に、師匠一名と弟子一名の関係の事例を提示してきた。ここでは、一人のウラマーが、ヴォルガ・ウラル地域内を遊学する中で複数の師匠に師事し、人的コネクションを形成する過程を示したい。リザエッディン自身が複数の場所を移動し、複数の師匠のもとで研鑽を積んだウラマーであるが、[①]ここで紹介するのは、ʻAbd al-Laṭīf b.

Chūrāsh b. Chuwākāy（一七六七／六八～一八三七／三八年）という、ヴォルガ中流域南部（ウラル南麓の西部、またはカザフ草原北端とも言える）のウラマーである。彼は複数の師匠のもとで学問を修めた後、ミョエミン（Mu'min）村（おそらく現オレンブルク州アセケーエフ地区スタロムクメネヴォ）という村落のイマームを務めた。そもそも、彼の父Chūrāsh b. Chuwākāyもウラマーで、ザカザニエ地方のカレリノ村（現タタルスタン共和国バルタスィ地区）の'Abd al-Salām b. Ḥasan al-Qārīlīのもとで学んでいたが、その時にそこで彼が誕生したという。その後、彼の父は彼を連れて、イマーム職に就くため、任地の「ブグルスラン（Būghurūslān）郡コル・シェリーフ（Qul-sharīf）村〔現オレンブルク州アセケーエフ地区スタロクルシャリポヴォ村〕」に移ったようである。②

リザエッディンは、'Abd al-Laṭīf b. Chūrāshが写本の空きページに書き留めた遊学の記録を、『事績』に書き写している。興味深い記述がみられるため、少し長くなるが、次に全文を示す。

私、'Abd al-Laṭīf Chūrāsh ūghlī は、知識を求めるという目的で、〔露暦〕一七八九年三月二日、キネレ（Kīnālī）川〔現ボリショイ・キネル川〕の岸にあるコル・シェリーフ（Qul-sharīf）村〔上述の現オレンブルク州アセケーエフ地区スタロクルシャリポヴォ村〕を出発した。'Abd al-Rashīd āghāy のところに寄り、ウルス・スィ（Ūris sūyi）村〔現タタルスタン共和国ユタザ地区ウルッスー〕に到着した。そこから徒歩で（yayāwlab）行き、ビョゲルメ（Būgilma）市〔現タタルスタン共和国ブグルマ市〕で二年有効の通行証（pāspūrt）を取得した。ヤンスブ（Yānṣibī）村〔おそらく現タタルスタン共和国ククモル地区ヤンツォビノ村〕のNadhīr āghāyの荷物を〔受け取り〕、持って行った。この旅路において、カリレ（Qārīlī）村〔上述のカレリノ村〕の'Ābid師のもとで教育を受けて二年経ち、三年目になる時に'Abd al-Ghāzī āghāy が〔私を迎えに〕来て、連れ出した。その時我々は、カリレ村からサスナ（Ṣāṣnā）村〔現タタルスタン共和国バルタスィ地区ニジニャヤ・ソスナ村〕のṢafar師のマドラサに移った。その後、ひと夏を自宅で過ごした。冬が来ると、ティメルシュク（Timir-shaykh）村〔現タタルスタン共和国サバ地区ティメルシク村〕のḤasan āghāy

と一緒に再びカリレ村に行った。そこで一年を過ごし、二年目になる前、冬の初めにカリレ村の‘Alīkāy āghāy を雇って、Ibrāhīm mullā と一緒に〔自宅に〕帰った。その冬と夏は自宅で過ごし、秋に、Tāj al-Dīn āghāy を雇ってカルガル（Qārghālī）〔オレンブルク近郊の現タタルスカヤ・カルガラ〕の Ḥājjī ‘Abd al-Rashīd 師のマドラサに行き、その冬はそこで教育を受けた。その後、春に自宅に帰った。これは〔露暦〕一七九五年六月二日のことだった。夏は自宅で過ごした。冬、‘Abd al-Ghāzī āghāy が「ウルス・スィ〔ウルッスー〕村に」と言って〔そこへ行き〕、そこでベイレケ（Bayraka）村〔現タタルスタン共和国ユタザ地区バイリャカ村〕の‘Abdūkay という者を雇い、〔我々は〕再びカリレ村に行って、‘Ābid 師から一年間教育を受けた。二年目の夏に我々はアルバシュ（Ārbāsh）村〔現タタルスタン共和国バルタスィ地区〕に移り、そこで夏を過ごした。冬、ナラサ（Nalāsā）村〔現タタルスタン共和国アルスク地区〕の Ni‘mat Allāh 師のところに伺って、教育を受けた。春になった時、オレンブルク〔出身〕の人びとと一緒にハサンシャイフ（Ḥasan-shaykh）村〔現タタルスタン共和国アルスク地区〕の Khalīl という名の者を雇って自宅に帰った。これは〔露暦〕一七九七年のことだった。③

まず、ここにみられる‘Abd al-Laṭīf b. Chūrāsh の師匠について確認しておく。「カリレ村の‘Ābid 師」とは、カレリノ村で活動していた‘Ābid b. ‘Abd al-‘Azīz b. ‘Īsā al-Kināārī（一八三三／三四年没）というウラマーである。「サスナ村の Ṣafar 師」は Ṣafar b. Ismā‘īl b. Murād al-Tālqishī（一八二〇／二一年没）であり、「カルガルの Ḥājjī ‘Abd al-Rashīd 師」は‘Abd al-Rashīd b. ‘Abd al-Karīm al-Sa‘īdī（一八一五／一六年没）という、シリアのダマスカスで学んだとされるウラマーである。「ナラサ村の Ni‘mat Allāh 師」とは、上述の②⑷ Ni‘mat Allāh b. Raḥmat Allāh を指す。④‘Abd al-Laṭīf b. Chūrāsh の書きぶりから推測すれば、この四名の師匠の中では、最後の②⑷ Ni‘mat Allāh b. Raḥmat Allāh が、最も権威ある人物だったようである。カルガルの‘Abd al-Rashīd al-Sa‘īdī を除けば、皆ザカザニエ地方で活動していたウラマーである。

また、‘Abd al-Laṭīf b. Chūrāsh はこの「学問の旅」を一七八九年に始め、一七九七年に終えている。彼自身が一七六七

／六八年の生まれであるため、彼は二〇代のほぼすべてを、この研鑽の旅に捧げたことになる。それ以前の彼の勉学について、『事績』に記述はないが、父 Chūrāsh b. Chuwākāy か、または自宅に近い村落のウラマーのもとで学んだに違いない。そして、この引用文にみられる師匠は皆、遠方から学びに行くだけの価値があるウラマーだったと考えるべきだろう。

さて次に、この引用文に依拠して ʻAbd al-Laṭīf b. Chūrāsh の移動の様相を整理する（都市名・村落名は便宜上、引用文のテュルク語に基づいて記す）。まず、彼は自宅のコル・シェリーフ村を出てウルス・スィ村に寄るが、これは北に二〇〇キロメートル弱の移動だったと推測できる。そこから徒歩でビョゲルメ市に行って通行証を得るが、これは西に五〇キロメートル強である。ビョゲルメ市の先、ザカザニエ地方のヤンスブ村へは、北西に三〇〇キロメートル弱の移動だったと考えられる。ヤンスブ村の先は、ザカザニエ地方の中における移動である。ヤンスブ村からカリレ村へは北西に四五キロメートル、カリレ村からサスナ村へは北西に五キロメートル強である。ティメルシュク村は、サスナ村やカリレ村の南四〇キロメートル強に位置する。

その後、彼は自宅のあるコル・シェリーフ村に帰るが、次にカルガルをめざす。コル・シェリーフからカルガルへは、南東に三〇〇キロメートル強である。つまり、彼にしてみれば、ザカザニエ地方よりもカルガルの方がはるかに自宅に近いのである。彼はカルガルから自宅に戻ると、その後再びウルス・スィ村経由でザカザニエ地方のカリレ村に行く。ちなみに、ベイレケ村はウルス・スィの北二〇キロメートルに位置する。カリレ村で過ごした後、彼はやはりザカザニエ地方の中で移動を始め、アルバシュ村に赴く。アルバシュ村はカリレ村の西一〇キロメートル強に位置する。アルバシュ村からはナラサ村に行くが、これは南西に五〇キロメートル弱の道程である。そして、ナラサ村から帰郷する。ナラサ村の北東五〇キロメートル強に位置するハサンシャイフ村の者（後述するように、おそらく御者）を雇い、オレンブルク出身の人びとと一緒に、故郷まで五〇〇キロメートル以上の旅をしたということになる。

この ʻAbd al-Laṭīf b. Chūrāsh の学問の旅の仕方から、推定できることがある。第一に、彼にとっては、イスラームの学

術文化の中心として、ザカザニエ地方がカルガルよりもはるかに重要だったことである。通説では、ヴォルガ・ウラル地域のイスラーム文化の展開におけるカルガルの役割の大きさが強調されるが、[5] この ʻAbd al-Laṭīf b. Chūrāsh の事例や、本稿がこれまで確認してきたザカザニエ地方の存在感からすれば、少なくとも一八世紀後半については、そうした通説に若干の修正を施してもよいだろう。第二に、ザカザニエ地方では多くの権威あるウラマーが活動しており、一旦この地方に来てしまえば、その中の村々をめぐって複数の権威あるウラマーに師事できたということである。これはウラマーの人的ネットワークの形成において、非常に大きなメリットだったはずである。第三に、人的コネクションについて言えば、ʻAbd al-Laṭīf b. Chūrāsh が二度、計三年間学んだ師匠であるカレリノ村の ʻĀbid al-Kinārī とは、もともとカレリノ村の ʻAbd al-Salām b. Ḥasan al-Qārīī に師事していた人物である。[6] つまり、ʻAbd al-Laṭīf b. Chūrāsh の父親である Chūrāsh b. Chuwākāy と、師匠の ʻĀbid al-Kinārī は学友だった可能性が高い。ʻAbd al-Laṭīf b. Chūrāsh がカレリノ村で生まれたことからすれば、師匠の ʻĀbid al-Kinārī は彼の赤子の頃を知っていたかもしれない。このことは、ウラマーの人的ネットワークがこの種の人間関係によって構築されたことを示す、良い事例だろう。

さらに、ウラマーの移動にともなう技術的な面について、先の引用文から理解できることがある。第一に、馬車を雇って移動していたことである。ʻAbd al-Laṭīf b. Chūrāsh は、徒歩で移動したルートについては「徒歩で」と明記しており、それ以外は基本的に車を使ったとみてよい。引用文に登場する ʻAbd al-Rashīd āghāy や ʻAlīkāy āghāy といった人びとは、おそらく御者である。第二に、通行証を得るための手続きをしていたことである。これは制度から推測できることではあるが、本稿はウラマー自身の記録により、このことを確認できた。第三に、同じ方向に旅をする人びとが一緒に移動していたということも、引用文から確認できた。

本稿はこれまで、師匠と弟子の一対一の繋がりの事例を複数のウラマーについて提示し、さらに、一人のウラマーが複数の師匠に師事する場合の具体例を示した。筆者は、この二種の人的結びつきが組み合わさった状況を推測することで、

ウラマーの人的ネットワーク形成の様相を理解できると考える。一八世紀後半のヴォルガ・ウラル地域には、ウラマーの師弟関係を基盤とするイスラーム教育網が形成されていたと言ってよいだろう。

① 詳しくは、磯貝「一九世紀後半ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域のマドラサ教育」。

② Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(6), pp. 333-334 (no. 194).

③ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(6), pp. 333-334 (no. 194).

④ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(3), p. 136 (no. 105); p. 137 (no. 107); pp. 155-157 (no. 121); 1(6), p. 297 (no. 179).

⑤ 一例として、濱本真実『共生のイスラーム――ロシアの正教徒とムスリム（イスラームを知る五）』、山川出版社、二〇一一年、七〇～七二、七九～八一頁。

⑥ Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(6), p. 297 (no. 179).

七　社会層としてのウラマー――師弟・学友関係、姻戚・親戚関係

さて、上述の'Abd al-Laṭīf b. Chūrāsh の事例について、親子二代にわたってウラマーである場合に、親の学友のもとで子が学んでいた可能性を指摘した。また、これまで本稿が紹介した事例の中には、師弟・学友関係に基づいて姻戚・親戚関係が形成されたことを指摘できる事実がある。そうした人間関係について、次に整理して示すこととする。

まず、師匠の娘と結婚し、師弟関係のみならず姻戚関係も築くということがあった。⑨ Amīr-khān al-Tālqishī が、師匠の③ Muḥammad-Raḥīm al-Āshiṭī の娘、'Azīza と結婚した事例がそれである。師弟が舅婿の関係を形成する。こうした例は少なくなかったらしく、たとえば、Ja'far b. Adnā-qul al-Āgirjiwī（一八二一／二二年没）というウラマーの妻は、彼の師匠であるカレリノ村の'Abd al-Salām b. Ḥasan al-Qārīlī の娘、Ḥabība だった。① また、学友の姉妹と結婚し、姻戚関係を築くことも行なわれた。④ Ibrāhīm b. Khūjāsh は、③ Muḥammad-Raḥīm al-Āshiṭī とともにダゲスタンに遊学した間柄だが、この学友の姉か妹である Munawwar と結婚した。結婚はダゲスタン遊学前のことだったらしく、Munawwar は、夫と兄弟がダゲスタンにいる間の一〇年以上を待ち続けたという。②

ウラマーの間で姻戚・親戚関係が形成されると、たとえば、妻の兄弟が年下である場合に、その教育の面倒をみるとい

ったことも行なわれた。時期的に少し後の事例だが、リザエッディンと義兄のギルマーン・カリーモフ（Ghilmān b. Ibrāhīm b. Yūnat b. ʻAbd al-Karīm、Ghilmān b. Ibrāhīm Karīmūf、一八四一～一九〇二年）の関係がそれである。ギルマーンは、リザエッディンの姉であるMaʻṣūma bt. Fakhr al-Dīn b. Sayf al-Dīnと結婚し、幼い義弟のリザエッディンを連れて故郷から離れたマドラサに行った。そして、イスラームの教義についての初歩的な知識を自ら授けた。[③]

ここで、ウラマーの子どもについて簡単に説明したい。ヴォルガ・ウラル地域のムスリム地域社会においては、ウラマーの息子はマフドゥーム（makhdūm）、娘はマフドゥーマ（makhdūma）と呼ばれ、一般の農民等の子どもとは異なる扱いを受ける存在だった。息子は、将来ウラマーとしての学識を身につけ、イマーム等の職に就くべきとして、幼い頃から遊びを控えて勉強することを奨励されたと言われる。一般の農民等の子どもと一緒に遊ぶことを禁じられて育った者もいたとされる。娘の場合は、アブスタイ（abiṣṭāy、абыстай）となるべく育てられた。アブスタイとは、通例、イマームの妻であり、教区であるマハッラで、幼い子どもや女子の教育を行なったり、女性の相談にのったりする女性有識者である。つまり、ウラマーがウラマーの娘と結婚すれば、イマームおよびアブスタイの夫婦として、マハッラの業務を支障なく行なうことができるという社会的制度が成立していた。[④]

つまり、ヴォルガ・ウラル地域のウラマーは、師弟・学友関係と姻戚・親戚関係の複合によって、身分集団に近い特徴を持つ社会層を形成していたと言える。そして、ウラマーの中には、商人と姻戚・親戚関係を築くことで経済的な安定を確保する人びともいた。本稿が提示した事例では、③Muḥammad-Raḥīm al-Āshiṭī や⑦Ḥabīb Allāh b. Ḥusayn が、それにあたる。家系が軍務タタールにさかのぼるとされる一族と姻戚関係を結んだ、上述のウラ村のYūnus b. Īwānāy b. Ūsāy の例もある。そのようにして、ウラマー層が地方名士層の一角を占めていたことも指摘できるだろう。

① Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(3), p. 159 (no. 124). 本稿でこれまで何度も登場する、カレリノ村のʻAbd al-Salām b. Ḥasan al-Qārīī というウラマーが多くの弟子を養成し、人脈を作るのに熱心だったということでもある。

② Riḍā' al-Dīn, *Āthār* 1(5), pp. 225–238 (no. 139), esp. p. 230.

③ 磯貝「一九世紀後半ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域のマドラサ教育」; Muḥammad-Fātiḥ al-Karīmī, *Marḥūm Ghilmān akhūnd*, Orenburg: M.-F. G. Karimov, 1904. さらに言えば、ギルマーンの子がファーティフ・ケリミー（Muḥammad-Fātiḥ al-Karīmī、一八七〇～一九三七年）であり、後にリザエッディンとファーティフという叔父と甥は、『ワクト（*Waqt*）』（オレンブルク、一九〇六～一九一八年）紙と『シューラー』誌を編集・発行して、中央ユーラシアのテュルク系ムスリム言論界で大きな影響力を持つことになる。

④ (Riḍā' al-Dīn b. Fakhr al-Dīn), *Asmā' yāki 'amal wa jazā'*, Orenburg: M.-F. G. Karimov, 1903, p. 10; *Махмутова, Анна Х.* Лишь тебе, народ, служенье!: история татарского просветительства в судьбах династии Нигматуллиных-Буби. Казань: Магариф, 2003, С. 48–49; アブスタイ同様の女性有識者を、ウラル南麓では「オスタビケ（ustādh-bīka、остабика）」とも呼ぶ。ただし、こうしたウラマーの子どもの姿はあくまで理想的に育つ場合の話であり、「落ちこぼれ」がそれなりに存在したことは想像できる。ちなみに、正教の聖職者の娘のためには、一八四三年以降宗務院の管轄下で、聖職者の妻となるにふさわしい女性の育成をめざす学校が設立されていった。つまり、ムスリム聖職者が農民等の身分に属す一方で正教の聖職者は聖職者身分を有したという相違があり、政府の宗教的活動に対する関与の程度もそれぞれ異なるけれども、聖職者の再生産を支える社会的制度という点では、ムスリムと正教徒は類似した構造にあったと言える。正教の聖職者の娘の教育については、橋本伸也『エカテリーナの夢ソフィアの旅――帝制期ロシア女子教育の社会史』、ミネルヴァ書房、二〇〇四年、九七～一四五頁。

八　結　論

本稿は、リザエッディン・ブン・ファフレッディンが著したウラマー人名録『事績』を基本史料として、一九世紀前半までのヴォルガ・ウラル地域のウラマーの移動と人的ネットワーク形成の様相を描き出すことを試みた。一八世紀末か、遅くとも一九世紀初頭までは、ダゲスタンに遊学するウラマーが存在した。そうした人びとは、帰郷後、ザカザニエ地方の村落において、イマームやムダッリスとして活動する傾向にあった。また、一八世紀後半のザカザニエの村落地域には、ブハラ遊学を経験してその学問伝統を継承するウラマーが増え始めた。それに少し遅れて、オレンブルク近郊のカルガルのウラマーの学統を受け継ぐウラマーも現れ始めた。ヴォルガ・ウラル地域内では、彼らに師事するためにザカザニエ地方をめざす学生が増加した。そうした遊学の流れの中で、ダゲスタン帰りの師匠についた学生がさらに域外で学ぶことを

志す場合、もはやダゲスタンを選ばす、ブハラに行く傾向が生じた。一九世紀初頭には、カザンおよびザカザニエ地方とブハラの間に、ウラマーの師弟関係による強固な学問的紐帯が成立していったと言える。

また、ヴォルガ・ウラル地域内では、たとえばヴォルガ中流域南部の学生が、ザカザニエ地方の村落をめぐって複数のウラマーに師事する「学問の旅」を行なうという現象が生じた。一八世紀後半にその種の域内遊学をした学生の中には、ザカザニエ地方をカルガルよりも重視する者がいた。いずれにせよ、一八世紀後半のヴォルガ・ウラル地域の中では、ウラマーの師弟関係を基盤とするイスラーム教育網が形成されていたと言ってよい。そして、ウラマーは、師弟・学友関係と姻戚・親戚関係の複合によって、身分集団に近い特徴を持つ社会層を形成し、地方名士層の一角を占めていたのである。

最後に、ヴォルガ・ウラル地域内におけるイスラーム的学術文化の拠点の多くがザカザニエの村落地域に存在したことについて、チャレンジングな考察を試み、本稿を終えたい。ザカザニエ地方のニジニャヤ・ウラ村と、そこをポメスチエとした軍務タタールの家系をはじめとする名士の研究をしたサリーホフは、軍務タタールがピョートル一世（位一六八二～一七二五年）の政策から受けた影響について、通説とは相当に異なる見解を示す。もともとロシア人正教徒の士族層と同等の法的地位を有していた軍務タタールは、ピョートル一世によって、サンクト・ペテルブルク建設や軍艦建造のための森林伐採・運搬という過酷な義務を課せられた。彼らは「ラシュマン」と呼ばれたが、軍務タタールはその他にも、ポメスチエを没収されたり、国有地農民同様に課税されたり、徴兵対象にされたりし、通説によれば、農民と同等の地位に降格されて、経済的にも没落してしまった[1]。ところが、サリーホフは、軍務タタールがそうした目に遭いながらも、企業家的な立ち回りをし、ラシュマンとしての業務の組織化と経営に奔走して、結局は資本を蓄積する機会を得たと述べるのである[2]。

このサリーホフの新しい見解が妥当なものであるならば、本稿が示したザカザニエ地方の様相を可能にした社会経済的状況について、ある程度説明することが可能だろう。事実、ザカザニエ地方は軍務タタールのポメスチエが多く存在した

地域である。彼らがピョートル一世期以降続く厳しい政策をものともせず、資本を蓄積し、それをモスクやマドラサに投下したと考えれば、一八世紀後半のザカザニエのウラマーの活発な活動は理解し易い。だが、これを確証するためには、さらに多くの農村社会史研究の成果が必要である。現在、多くのタタール人やバシキール人の研究者によって、個別の村落の歴史研究が精力的に進められている。これについて最終的な結論を出すには、今後の研究の進展を待ちたい。

①濱本『「聖なるロシア」のイスラーム』、一八六～一八九頁を参照。　②*Салихов*, Служилая Ура, С. 20-28.

※本研究はＪＳＰＳ科研費ＪＰ一六Ｋ一六九二六の助成を受けたものである。

（京都外国語大学非常勤講師）

The Russian 'Ulamā' and Their Islamic Educational Network Before the Mid-Nineteenth Century

by

ISOGAI Masumi

This paper illustrates various aspects of study journeys and the formation of networks made by the *'ulamā'* (Islamic scholars) of Russia's Volga-Ural region before the mid-nineteenth century, based on the *Āthār* by Riḍā'al-Dīn b. Fakhr al-Dīn (1858–1936). The *Āthār* is a biographical dictionary of the *ulama* in the region written in Turkic, and its author, Riḍā'al-Dīn, was prominent among the *ulama* in the region.

By the end of the eighteenth century, or the beginning of the nineteenth century at the latest, some Turkic Muslims in the Volga-Ural region were traveling to Dagestan to study. After returning home, they were more likely to work as *imāms* or *mudarrises* in villages in the region of Zakazan'e, located to the northeast of Kazan. Although the *ulama* with experience of studying in Dagestan were small in number, they played an important part in Islamic education in the Volga-Ural region because they trained in turn many disciples as *mudarrises*. Moreover, in the late eighteenth century scholars who had studied in Bukhara and preserved the intellectual tradition of the Bukharan *ulama* gradually increased in Zakazan'e. Some students pursued acquisition of knowledge in Bukhara even after studying in Dagestan under the *ulama*. Such people also taught students Islamic disciplines as *mudarrises* on the basis of the Bukharan educational tradition after returning home. Somewhat later, people who had studied in the village

of Qarghalī near Orenburg also appeared in Zakazan'e. Among them were *ulama* who had studied in both Qarghalī and Bukhara. Islamic education in Zakazan' e eventually inherited the Bukharan style of teaching Islamic knowledge, and within the Volga-Ural region people traveled to Zakazan'e to study Islamic disciplines. As a result, the prevalence of this type of study among the *ulama* built up strong Islamic academic ties between Zakazan'e (or the Volga-Ural region as a whole) and Bukhara, ties that were grounded in connections between masters and disciples.

At least in the late eighteenth century, within the Volga-Ural region, some students traveled around villages in Zakazan'e to study with several famous teachers. A case found in the *Āthār* shows that a student from the south of the Middle Volga who made such a "journey for seeking knowledge" might have regarded his study in Zakazan'e as more important than that in Qarghalī. He studied with several teachers in villages in Zakazan'e for longer periods than in Qarghalī, though his home village was located much farther from Zakazan'e than Qarghalī. Furthermore, he referred to one of his masters in Zakazan'e as the most worthy of respect among his all teachers. This fact is interesting because it is often emphasized that educational activities of the *ulama* in Qarghalī encouraged the development of Islamic culture widely in the Volga-Ural region.

In any case, an Islamic educational network based on master-disciple relationships among the *ulama* was developed in the Volga-Ural region in the second half of the eighteenth century. Many sons of the *ulama* were brought up to be members of the *ulama*. Marriages occurred between disciples and daughters of their masters. There were also students who were married to sisters of their fellow scholars. In fact, daughters of the *ulama* were usually brought up to be able to serve as suitable wives of *ulama*. In the Russian Empire, the *ulama* formed a social group similar to an estate (*soslovie*) through such master-disciple relationships and kinship or marital bonds.